

J **apanese text**

2010年 春/夏号 日本語編

工芸

ガラスの茶会

撮影=佐藤竜一郎 コーディネート=横瀬多美保
協力=海上和子 文=編集部

p.070

ガラスは器の素材として、漆や土に比べると歴史が浅いけれど、今新たな発展を見せようとしています。日本のガラス作家たちは、自分の土地の風土や歴史に育まれた色や文様を見直し、独自のガラスの形を追求しています。そして、抹茶碗など、お茶会で使われる道具を作り始めました。日本の伝統色もガラスに使われるようになりました。

夏の暑い日に、涼しげなガラスの器で演出して、お茶会を開いてみてはどうでしょうか。

(p.071)

おおむろももお **大室桃生 作の茶道具**

大室さんは、古代メソポタミアで考案されたパートドベールという技法を使っているが、中央アジアの布の柄や、日本の器の絵付け、帯の柄をデザインの参考にすることが多い。左の写真は、抹茶碗(直径14.5cm×高さ7cm、46,200円)。上は、水指し(直径21cm×高さ13cm、14,7000円)。

一見陶器のようにも見えるが、自然光が当たると透明度が増し、色鮮やかに柄が浮き出してくる。抹茶碗の後ろにある水指しは、今人気の中国人作家高振宇作。桑の木の茶いれと合わせて。

「毎日の食卓がより楽しくなりますように！」
——今注目の8人のガラス作家たち

p.072

おおむろももお **大室桃生**

古代メソポタミアで考案されたガラス工芸の技法、パートドベールを用いる。粘土を原型として型を作り、その中に砕いた色ガラスに糊を混ぜたものを詰めて焼成する。「ガラスの粉の量を測ることや、緻密な仕事を好まないの、この手法が自分に一番合っているんです」と話すが、窯から出てくる作品は、伸びやかでありながら、細かく繊細な文様が施されている。個展を開き始めてから9年目を迎える大室さんは、今注目の人気のガラス作家のひとりだ。

つじかずみ **辻和美**

金沢美術工芸大学でグラフィックデザインを学んだが、自分の進みたい方向が見出せず、CCA (California Colleges of the Arts) へ留学。そこで初めて吹きガラスに出会った。「平面の世界から、熱く立体的なガラスに触れて、やっと自分が解放できました」。1999年にfactory zoomerという工房を金沢に立ち上げ、現代美術の作品を発表しながら、器を作っている。主な技法は吹きガラス。北欧で発展した「グラール・テクニク」を使う。形を作る前にガラスに文様を付けてから、吹いて形を作る。

えなみふじこ **江波富士子**

4mmから6mm角のガラスのコマを、左下の写真にあるように、ピンセットでひとつひとつ組み合わせて、モザイクのような文様を作る。気の遠くなるような細かい作業に見えるが、「この作業がとても楽しいんです！」と笑顔を見せる江波さん。組み合わせたものを熱して溶着させ板状のガラスを作る。それを曲げ、吹きガラスにより形成する。(一番右、上から2番目の写真)。ムリーニという技法を使う。

うしお **小西 潮**

米国のチャダムガラスカンパニーで経験を積んだ後、1998年に江波さんと共に吹きガラス工房を立ち上げた。ヴェネチアン・ガラスで使われるレースガラスの技法を使っているが、さらに線が細く繊細な独自のデザインを生み出し、3年前から茶道具を作っている。波線の入った棒状のガラスを作り(上から2段目、左から3番目の写真)、それを合わせて溶着させる。「線が細いので、華やかでありながら、料理をじゃましないので、私はこの技法が好きなんです」

たえこ **山田 妙子**

出版社勤務後、化学の実験器具を作る会社に勤務し、バーナーワークを学ぶ。耐熱ガラスを酸素バーナーで加熱しながら製作するバーナー・ブローという技法を使う。「この技法では、目から30cmも離れていない手で細かい細工が

できるのです。ただし、顔の近くは常に40度以上になり、手も低温やけどをすることも頻繁にあります」

動物や魚をつまみにあしらった蓋付きの壺や香水瓶、アクセサリー、ペンなど小さく愛らしい作品を作っている。現在、沖縄に工房「ひとつ房」を構える。

ハシヅメミツコ

美術の教員をしていた24歳の時、休みにインドに行こうとしたが、周囲に大反対された。そして、ふとガラスのワークショップに参加してみた。それがきっかけで、ガラス作家の道を進む。「器を通して自分の強い思いを表現するのではなく、自分がその時々で楽しいと思う色や柄を合わせていきます」。

技法は、材料に直接手で触れることができるキルンワーク。耐火石膏で型を取り、その中に砕いたガラスを詰めて焼く。焼き物にも似た工程が好きだと言う。

林久美子

絵を描くことが大好きで、ガラスの絵付けを専門としている。色彩豊かな植物を中心とした絵柄で、見る人を楽しく幸せな気持ちにさせると好評だ。ガラスを始める前は、インテリアのデザイン会社に9年間勤務しており、色合わせの感覚はそこで習得したと話す。今年の春の展覧会のために、現在お茶をテーマに作品を制作中。ガラスの器を作る傍ら、テキスタイルのデザインも行っており、商品化している。

高橋 禎彦 よしひこ

透明な吹きガラスの第一人者。高橋さんは、現代美術を作ることからガラスの世界に入った。1980年代、2年間ドイツのガラス工房で働いた後、ドイツや日本の美術館で作品を発表し、個展も数多く開いてきた。東京の国立近代美術館も作品を収蔵している。器作りは、2000年から始めている。現代美術のような斬新なフォルムと、滑らかな質感が特徴。「火が作る滑らかなガラスの表面、遠心力や吹いた空気のできるフォルムが美しいので、私は道具でなるべく表面を触らないようにしています」

365 日の器

——辻和美

p.074

ガラス界を牽引する作家たちは、ここ2、3年、お茶道具を作り始めた。例えば、抹茶碗、水指し、抹茶を入れる茶入れ、金平糖を入れる振り出しなど。漆や木や土に比べると、ガラスの歴史は日本では浅いが、お茶の世界を通して独自の形とデザインが生み出されている。

このページの水指しと抹茶碗を作った辻和美つじ かずみさんは、小京都とも呼ばれる金沢で生まれ育った。家は伝統的な木造の家屋で、庭園と茶室があった。母親は茶道に親しみ、華道も教えている。伝統文化にどっぷり浸かった幼少時代だった。「そんな母親と自分の育った環境に反発して、初めはガラスで現代美術を作っていました。でも、自分の生まれ育った環境のせいか、最近、やっぱり器を作らずにはいられなくなってきたのです」

この黄色の抹茶椀は、日常の日々を表現する365の数字をデザインしたもの。「昨日と変わらない今日があります。でも、普通に生きている奇跡を感じる時がある。一日一日を大切に過ごし、その繰り返しのリズムを大切にしたいという想いがあります」

辻さんのコンセプトは、今回のお茶会を開いてくださった武者小路千家正教授うながみかずこの海上和子さんの話と重なるようだ。「茶道には、数多くの決まり事や作法がありますが、それは永遠に続くような日常生活から一時離れて、非日常のを楽しむためのもの。そうして、何も無い日常にリズムを付けるのです」と海上さんは話す。

毎日毎日を丁寧に過ごし、日常のリズムを大切にしたいと思う、茶道にも通じる考えを抹茶碗に表した辻さん。今後も金沢で製作される新しいガラスの器の発展が楽しみだ。

(p.075) 100年以上前に作られた鉄の風炉釜と、黒田辰秋作の茶入れ、中国の高振宇作の茶碗と取り合わせた、辻さんの水指し(直径15cm×高さ15cm、126,000円)。八手の葉を蓋に。金沢美術工芸大学でグラフィックデザインを学んだ辻さんの文様は、大胆で現代的でありながら、茶室に馴染んでいる。抹茶碗は、365の数字をデザインしたもの。(直径14cm×高さ7cm、315,000円)

限りなく華やかで繊細な文様

—小西潮、江波富士子

p.076

富士山が対岸に大きく迫って見える雄大な景色の中に、13年前ガラス工房を構えた小西潮さんと江波富士子さん。5年前からお茶を習い始めた小西さんは、毎年鎌倉の円覚寺で開かれる夏のお茶会のために、お茶道具の製作に取り組んでいる。繊細なレースのようなパターンで、右頁のように、茶入れ、菓子入れ、銘々皿、お向こうなど、茶懐石のシーンで使われる様々な道具を作っている。工房の2階には茶室を作り、日々お前の点前練習をしながら、茶室で使うガラスの形とデザインを研究中だ。

そんな小西さんに刺激されて、今回初めて抹茶碗と茶入れを作った江波さんは、「自分の新たな目標ができた」と話す。「最初は、単に見て楽しいガラスを作っていました。お茶道具を作り始めてみて、使う人がいて初めて、自分の作品が完成されることに気づきました。見ただけでなく、使われた時にも美しい器を作りたい」。今のガラス界を牽引する人気作家のこれからの作品が益々期待される。

(p.076) 左は、江波さんが作った花器（高さ34cm×口径17cm、157,500円）。スタンドグラスにも似た光の動きが室内を明るくする。

右ページは、すべて小西潮さんが作ったお茶道具。

右上・菓子入れ（直径16cm、31,500円）。右下・お向こう（直径約19cm、15,750円）。左下・抹茶碗（直径15cm、21,000円）。左上・なつめ（高さ6cm、31,500円）。抹茶碗は他にも5色ある。

(p.078) 江波さん最新作の抹茶碗。茶道具を作りながら、「ガラスで作る日本の形とは何か」を追求している。最近日本の伝統色も作品に取り入れている。

小さくて愛らしい形の茶道具たち

—山田妙子

p.079

山田妙子さんは、出版社に勤めていた20代の時に、茶道の先生にガラスの世界を紹介されたのがきっかけでガラス製作の世界に入った。10年以上前から、お茶入れや、香合や、金平糖を入れる振り出しなどを作っている。

出版社を辞めた後は、どうかしてガラス製作の経験を積むために、化学の実験器具を作る会社に勤務。その2年間の勤務で習得したのが、耐熱ガラスのパイプを酸素バーナーの炎で加熱しながら製作していくバーナーワーク。勤務していた頃は、試験管などの透明なものだけを作っていたが、独立してからは、耐熱ガラスに色ガラスを重ねて、文様を付ける独自のスタイルを築き上げていった。

化学の実験器具などまるで想像もできないような、愛らしく華麗で小さな作品。現在は、茶入れや香水瓶など蓋付きの器作りに夢中だが、今後は耐熱ガラスを使っている利点を活かして、抹茶碗を制作することも検討中だ。

(p.079) 左は、お茶席で使う金平糖を入れる振り出し。手前のオレンジの器（高さ5cm×直径5cm、15,750円）、真ん中のグリーンとインクの器（高さ6cm×直径5cm、12,600円）、後ろのブルーの器（高さ9cm×直径4.5cm、47,250円）。下は抹茶を入れる茶入れ（高さ8.5cm×幅6cm、36,750円）

蕎麦猪口でティータイム

p.080

蕎麦猪口とは、口径が約7cm、高さが約6cmのコップのような形の器のこと。本来、蕎麦汁を入れるために作られたので蕎麦猪口と呼ばれている。約300年前、蕎麦が庶民の間で大ブームとなり、以来それに合わせて数限りないデザインの蕎麦猪口が作られてきた。素材は、陶磁器が主流。蕎麦に続いて、飲酒も大衆化したため、蕎麦猪口は酒などを

入れる器としても使われてきた。

その蕎麦猪口をガラスで作って見たら……飲み物やデザートを入れて、夏の涼しいティータイム。

(p.080) 左から順に サイダーにミントを添えて。辻和美さんのこのサイズの蕎麦猪口は全5種類ある。(5,250円) 大室桃生さんの泡が入ったガラスは、焼き物のようにも見える。(31,500円) 小西潮さんのレースの柄は、それだけでテーブルを華やかにしてくれる。(5,250円) 高橋禎彦さんのモールドのグラスに、ゼリーを入れて。(4,200円)

(p.081) ハシヅメさんのガラスの表面は、水色や紫の水滴が閉じ込められているようで涼しげだ。(5,250円) ハシヅメさんの蕎麦猪口に、冷たい抹茶を入れて。(各4,410円、または47,250円) 林久美子さんの蕎麦猪口に、タピオカとメロンを入れて(9,450円) 江波さんの人気の赤いガラスの蕎麦猪口。サイダーを入れて。(14,700円)

ガラスのパッチワーク ——ハシヅメミツコ

p.082

「食卓で料理がなくなった後も、テーブルを楽しむ器を作りたいのです」と話すハシヅメミツコさん。一枚の皿を作るのに、時には10色以上の色を合わせて作る。個性的な色の組み合わせだが、全体に霜が降りたようなやさしい風合になっており、まるで着物の柄のよう。お皿の上ののせるもの次第で、新しいデザインができそうだ。あなたなら、何をのせますか？

(p.083) モザイク柄の箱：10,500円～12,600円。お菓子ののった四角い皿：4,410円～6,300円。大皿：34.5cm×18cm、29,400円。楕円形の小皿：9cm×10cm、2,100円。皿の上にあるのは和菓子、クッキー、さくらんぼ。

ポップな柄でティータイム ——林久美子

p.084

ガラスに絵付けをしている林さんの一番の題材は、植物。散歩をする時も、どこに行く時も常にルーペをポケットに入れて、道端で出会った草花を拡大して見る。「自然が作った植物は、色も形もすべて完璧にデザインされていて、信じられないほど美しい。神様が作った植物以上のデザインは存在しないと思えるのです」と話す林さん。ルーペから見える植物の色と形をヒントに、ポップなデザインを生み出している。夏には、ベランダで野菜をぎゅっリプランターに植えている。植物が、野菜が生活に欠かせない。10種類以上の野菜が毎日収穫でき、八百屋に行く必要がない。

林さんの工房は、小さなマンションの一室。幅58cmほどの小さな電気窯と絵付けをするためのデスクがあるだけ。「私は見る人が幸せに、元気になるようなガラスを作りたいんです」。下書きは一切せず、頭にある植物のイメージをすらすらとガラスの表面に描いていく。

(p.084) 左は、はすの花を模した一輪挿し(高さ10.5cm×口径2.5cm、18,900円)。右上は、老松の絵柄の抹茶碗(直径15.5cm×高さ7cm、26,250円)。右下は、鉢(直径14.5cm×高さ10.5cm、32,600円)。なすの漬物を入れて。

火と遠心力が作る形

——高橋禎彦

p.085

東京の西端に位置する高尾山を越えた相模湖の近くに、ぽつんと現れる高橋禎彦さんの工房。夏は、日の出と共に窯に火を入れる。軽快なジャズのリズムに乗り、次々にガラスを熱しては、吹いていく。太陽が高く上がる頃には、約30個の器を仕上げる。軽やかな動きで仕上げられたガラスの器は、手に取ると、しっとりとした表面が肌に心地よく、驚くほど軽い。

透明なガラスを作ることが好きな高橋さんは、モールドの技術に惹かれている。「もともとヴェネチアで考えられた技法ですが、イタリアのものはひねりが強いのです。僕は、ひねりをちょっとゆるやかにしてみました。昔からあるシンプルな技法ですが、シンプルだからこそ、まだまだ追求する価値があるようです」

(p.085) 日本酒などを入れて注ぐ片口(下)は、高橋さんが器を作り始めた頃の最初の作品(横18cm×高さ9.5cm、9,000円)。火と遠心力が生み出すガラスの美しさを最大限に引き出すため、製作過程ではなるべく道具でガラスの表面を触らないようにしている。「ガラスは、火に入ると柔らかくなり、吹くと膨らみ、下に向けて伸びます。僕は、魚を刺身にする時のように、なるべくガラスに触れないようにしています」。ジョッキは、人気のゆるやかなひねりのモールドのデザイン。これからは、モールドの型もデザインする予定とのこと。(高さ10.5cm×直径6cm、7,500円)

個展スケジュール 2010 & 常設ギャラリー

p.086

大室桃生

● 3月17日～24日

『パードヴェールのシェード』

Dee's Hall 東京都港区南青山3-14-11 Tel.03-5786-2688

● 5月21日～23日

『日本の夏たく展』(着物作家など、複数での展示)

横浜三溪園 神奈川県横浜市中区本牧三之谷58-1

● 7月14日～8月16日

詳細未定

LISN 京都 京都市下京区烏丸四条 COCON Tel.075-353-6466

● 9月28日～10月10日

詳細未定

ギャラリー MITATE 東京都港区西麻布3-16-28 Tel.03-3479-3842

〈常設店〉

■ LISN 京都 京都市下京区烏丸四条下ル COCON

Tel.075-353-6466 p.70の抹茶碗も販売。

■ ギャラリー MITATE 東京都港区西麻布3-16-28 Tel.03-3479-3842

p.71の水指し、p.100の蕎麦猪口も販売

辻 和美

● 3月20日～3月28日

「色」と「形」

Feve、東京都武蔵野市吉祥寺寺本町2-28-2 2F Tel.0422-23-2592

Outbound、東京都武蔵野市吉祥寺寺本町2-7-4-101 Tel.0422-27-7720

● 5月8日～16日

「素描」

ギャラリー モーネンスコンビス(モーネ工房)

京都市上京区西堀川通丸太町下ル下堀川町154-1、エーワンテック本社ビル3階

Tel.075-821-3477

● 7月19日～24日

ZAKKA、東京都渋谷区神宮前6-28-5 宮崎ビル B1

● 10月23日～11月7日

「暮らしの形」

辻和美/三谷龍二 二人展

ギャラリー百草、岐阜県多治見市東栄町2-8-16 Tel.0572-21-3368

〈常設先〉

■ Factory Zoomer 工房兼 shop

金沢市清川町3-17 Tel.076-244-2892

<http://www.factory-zoomer.com/>

小西潮 & 江波富士子(潮工房)

● 3月6日～3月13日

Ecru + HM

小西個展“Tiny Tea Party”お茶を中心にした小品展

東京都中央区銀座1-9-8 奥野ビル4F Tel.03-3561-8121

● 3月20日～3月28日

江波 + 陶器の作家 2名とのコラボレーション 香合やお皿など。
うつわ屋花音 京都市左京区南禅寺福地町 83-1 Tel.075-752-4560

● 5月10日～5月21日

江波個展 花模様の器を中心に元気の出る作品
EN 陶 REZ 神戸市灘区徳井町 5-4-1 Tel.078-856-4147

● 6月11日～6月20日

小西江波二人展 大きめのガラス器の出品
TASTAS、栃木県鹿沼市天神町 1709 Tel.0289-64-0022

● 7月21日～8月1日

江波個展 “From Grandma’s garden”
夏の野菜をモチーフにした楽しいガラス作品
福光屋、東京都中央区銀座 5-5-8 03-3569-2291

〈常設店〉

- 卯甲 横浜市中区弁天通 4-52 1F Tel.045-227-7503
- カラニス 港区南青山 5-3-10 FROM1st 2F Tel.03-3406-1440
- うつわ屋あ花音 京都市左京区南禅寺福地町 83-1
Tel.075-752-4560
- KOKKOMA 渋谷区上原 1-33-17 Tel.03-5453-5521

連絡先：潮工房

<http://ushio-studio.com/>

山田妙子

● 4月28日～5月10日(予定)

ベルエクリン、新宿伊勢丹本店 5F、東京都新宿区新宿 3-14-1 Tel.
03-3225-3079

〈常設店〉

- 一善堂 (ホテルニューオータニ、ロビー 1階)
東京都千代田区紀尾井町 4-1 Tel.03-3239-0773
- 伊東屋銀座本店 6F 中央区銀座 2-7-15 Tel.03-3561-8311
- グラスギャラリーカラニス 東京都港区南青山 5-3-10
Tel.03-3406-1440

ひとつ房ホームページ www.hitotsubou.com

ハシヅメミツコ

● 3月12日～3月20日(土)

ギャラリー一葉 広島市中区八丁堀 8-2 Tel.082-221-0014

● 4月29日～5月9日

くらふと & ギャラリー OKURA、金沢市香林坊 2-10-6
Tel.076-236-3062

● 10月14日～4月19日

うつわ一客 大阪府豊中市新千里西町 3丁目 20-9 Tel.06-6871-9092

〈常設店〉

- 宙 東京都目黒区碑文谷 5-5-6 Tel.03-3791-4334
- ぐらすはうす 熊本市水道橋 3-4-103 Tel.096-356-3546

林久美子

● 4月14日～4月27日

抹茶椀、冷茶碗セットを主に、茶会をテーマにした 300点
日本橋三越本店 5F、中央区日本橋室町 1-4-1 Tel.03-3274-8543

● 7月21日～7月27日

お皿、ボール、抹茶椀、照明など 500点
玉川高島屋 5F アートサロン、東京都世田谷区玉川 3丁目 17番 1号
Tel.03-3709-3111

● 8月24日～9月6日(予定)

お皿、ボール、抹茶椀、照明など 500点
遊びのギャラリー、銀座松屋 7F、東京都中央区銀座 3-6-1
Tel.03-3567-1211

問い合わせ：林久美子 hayashicoo@trust.ocn.ne.jp

高橋禎彦

● 3月18日～4月2日

小さめのオブジェ・ガラス
ギャラリー TAO、東京都渋谷区神宮前 4-8-6 メープルハウス
Tel.03-3403-3021

● 4月7日～4月27日

器とオブジェの両方が展示

ギャラリーたむら 広島市中区三川町 10-17 ホンジョウビル 2F

Tel.082-241-7739

● 5月8日～5月16日

ギャラリー小西 京都市東山区祇園花見小路四条下ル西側

Tel. 075-561-1213

● 7月2日～7月7日

Epoca The Shop 日々 東京都中央区銀座 5-5-13

Tel. 03-3573-3417

● 9月19日～9月26日

工房イクコ 岡山県倉敷市中央 1-12-9

Tel. 086-427-0067

〈常設店〉

■ **わさらび** 東京都目黒区自由が丘 2-9-19 コリーヌ自由が丘

Tel. 03-3717-9191

■ **宙** 東京都目黒区碑文谷 5-5-6 Tel. 03-3791-4334

■ **サボアヴィーブル** 東京都港区六本木 5-17-1 AXIS ビル 3F

Tel.03-3585-7365

連絡先アドレス

yoshitakahashi@softbank.ne.jp

www.yorange.org